湖月鈔

ちくり

斎宮の御くだり　細 秋好中宮
宮也 秋好 群行九月十六日御
禊ノ義無事也 時日 孟 秋まて
八十代かれいうすくなれ
つゝせまうけり
こゝろにもとる　拾 六条御息
所立添てあらんとおもひて
報せしう(ママ)御名
りくし
ゆかりの君　細 葵上のうせ
給ひてのちハ此御息所こそ
源の本意をも御うらみさ
らしせの人も思ひよせて
ハあらぬをうらみて給を
そう
さいのみやも心ときめきせし
細 野宮にくだりまえ 評同
師 秋好の御事く大将の姫
きみてあつかひ世ハみよと
おもひよりても
　　細 源のう
しろ思給ハわれてゆき
まうてなりそうてみれ
まさなく
そこのあはれをおぼしすてゝ

斎宮の御くだりちかうなりゆくまゝに御やす
所ものこゝろぼそくおぼす やむごとなくわづ
らはしき物におぼえ給へりし大殿の君もうせ
給ひて後さりともと世の人もきこえあつかひ
宮のうちにも心ときめきせしを そのゝち
しもかきたえあさましき御もてなしを見給ふに
まことにうしとおぼすことこそありけめと
しりはて給ひぬればよろづのあはれをおぼし
すてゝひたみちにいでたち給ふ おやそひて
くだり給ふれいもことになけれど いと見はな
ちがたき御ありさまなるにことつけて うき世
をゆきはなれんとおぼすに大将の君さ

賢木　此巻ハ詞并哥をもて巻の名とせり 河 詞にはさかきの
といふ事なくてもまつりを給ふ哥に神垣はしるしの杉もな
きものをいかにまかへて折れるさかきそ 花 此巻ハ三十年の事
あり源氏廿二歳の九月より廿四歳の夏までの事とぞ知り
細孟同 孟津抄ニハ巻名一名松がうら嶋と云 哥にあり
海士の住家とこれにながむる松がうら嶋とあり

いそやとハ　細　引合よ為ふ
へかしもとらく意有りとは
ちひありらし　河紙どの
こゝろふといえぐおりべきを
いぞやんハ地かぬさうで
いそやとハんを地らにも
ありひきりてあけどとなえ
どもこいふやうのてで東よ
まへし　師　いそや大おき
みて抱こがろさ源のんを
もて對面を地つ身ひる
うしまく
むかれいてさを　理痛れ
師久しく源を又給いそお
がつうすく恋しぬ心のるや　おもより
あうけき野边を
源のおいそかり秋の(ゝ)のた、
もうくられ海をもいひや
袖のあまき　ええく
細　秘あきし好く「程の寿に
家の松風ゝよ(ゝ)しいられの
をよりえへ地ろんとよ(ゝ)
も秋文女治坐えおまそ
のちえん安ひて面白」　異同

けきうそこありられバゞぞやとは次第しゑ
づゝひあらしゞとあかりむしれてさきし
りのゞしゞりのたへめんえと、ひともれど
もらきえし　給ありわろき　野辺をかう
給らりいと袖わられるりえ秋のりみられた
とろへつおさらがうをられくおりうき出の
ねよ松風をごく吹かえをそ、ぞのことしも吹
まられぬ程よりおくゐをとしくさとし
まろいとえんなりむ川おしきごぞんずよん
ぞうゞずいぞんこうとぐちさきもがさるう
でいうきおのびまへまでごとうゆひきつてろひ
まへるはよういゝと次でさくこしまへバれ

おうろかもかしして
盡源の心かもめうの面白え
をうしと今まで馴さるま
とかり
抱ろろけかう小笑彼
細　秘表の山本のきあ之大聲
會の姫を望みて撫ゆ迦
表式よ見てきり凜敏の
ろく　延表式は大聲會
の姫八宗を捨て姫とよろ
うし見てより秋の野
え(ゝ)もきよ准もへし　盡太非
え八宗をとりて汚よもらく
不浄をとらさされゆへで
あきりく
きさうえ　師　秋多に高定
あるうよ任てして云んをと
可よ他合うると心ふく　おも吾文衛門意
とりる
吾八天の字をとうとうさく
弥おまえうも天地の間よ
人をお入るうんえをく
きをそぐるりうぐくしく
細　弥くえく之師うりそめ

とをなうをきりのどもと所りしきん女か
しまそ地りつりはらろふもなどていおく
てぶらあのしきゞりつんどすぎめううさ
らやしう地ほさ、抱えろうげなりうしぞ終
地有がきうまそいやどもあさりくいとり
そめかぬんり、らうざのとりゐどもへおを
がよろじくしくへそしわさられてよづうえ
しさゞこれなろよりんづうきのりのどもこ
りしよらちあへぶきそこそのどりとのい
ひさうけえひなども、ほりよえさ海うりて
えゐ、ひさきやりをるあらりて、ひとげなく
なくえあぐらうしてそてよりの地やうしきん(の)

月ごろのつもりを　おの此比の
とぶらを仰りとこわるなど
しまべきなどなれば之程相あ
かりしぬるを　細　吾心の
かりしきさ海を神の又
ましませてのまゝ　呼同
盂神ハ不変なりなれ
そまりかと同と源の詞之
花　後撰　久平振神咲山の
神ぐ附義よ之をかハ
らさりなり　河　をく君よ
之もかりしぬ神聖り
をやハ人のしめてまつ
らん
いがきもこそ給りよれ
細ちかやかる神のいがきも
こゝぬべしとハ吾身のお
しまくりなし　河同
師此寄ハ於遠よ人丸の寄
也　花　久平振神のいがき
もこゝぬべし大変人のこ
まくかしさに　師此寄ハ
俳聖抽語よありしなり

めぐらし　月ごろのつもりをつきぐし
うゆくしゆくらんとまばゆき　河　賢木　日本紀　坂樹　日　榊　俗字也
ばさりきしいさしかおりても給へりまるとさ
し入てかりしぬ　此屋の内へ
をこえ給よれざとむくとさてまへだ
神がきはしるしのまぎもなきものをいよ
まがへて給れるさうさぞとさてまへバ
　　源寄
をとめこがあらうと給へバざるまだ乃
給るけしとめてこそおれ給ひさのけ
ちひまづらけれどこすづらハ知さて
なげしよとしかりてゐまへり心よまう給
てこそまつりけべく人もしるひざ海よ

なくあふをかこのいがきをこゆるとうへ神なりよさうりあることゞ
さとふうと　源の心ハかうしぬを此皇所ハ源よあふすを陽心あるを心しこのまゝ
神がきハしるしの枝も　細　此皇所の前之ことがら雑物寄之　我ハ神ハしるしの山本志しくハとふ
らひきませ枝とそうの門の前をかくませて為ある人もあらじとしへどの心あり思ひけさり
しよし也　いかよまがへくとハ思ふがへでやなどの心之　師　此寄の神がきよハしるし此枝もなき
といかよ打まかへて神をしるべとして先へ此おぞと云之　一説云心ハ為給へきしるしもなき
抽をとゝ　御皇所ハさしも心つかくかハ甘しとひひなひし給しハよのめ給ふなどもしるべし
そのしるしもなくかれくよ此給てこそ文又かりしぬ文をしるべしそこと宣ふやとあらりてこそ
まつりいかよまかへてとハまきれしかれ心やとこれ云ふ　此寄ハ題之云々
をとめまが　河　末通女　万少女　日本記　乙通女　盂同　細　榊　案の書をとりしとめられどやそ氏
人もまとゐぬせりなり　此皇所のこゝよいかよまがへてなどこそ抽がしめしなべてだしを
ひまへる所まれをさしてハ為あらじなどやうよりうらがましさを源の君寄ハ此皇所のこゝ
をうどうくしりてこそ神の番をもなりしくてとめてハまつりられとこ
人もしるひざ海よ　細　人とハ御皇所之　しるひざ海よ此給ひし程ハさしもなくて共と切よ思ふ
まきまふとも也
まさこころのうらよハいかふそ
やきもまそ　細　物の事に
物給しまへ　呼　盂同　まさ心
のうらよハとハ　明　内よう人
りしこうよのくく
めづらしき此對面　細　此程中
絶さる所よ文よあつもしく
思給て　盂　此皇所　源よ對
面なり

抽がしたりつるとし月ハのどうなりつる此心を
ごりよさしを抽ぎされざりきさしさ此うら
よハいかふぞやさずありてしきて給ふし
のちそこあられをさめつくしなりを座
ぐらめる給めづらしきはこいめんのむかし

女ハさしをこえしと
源ハ心よりさき海をこえ
じとつめともしのびあへ
源のこゝろをこ
いふくんろしう
拙源のんよりくるさまふ
と云うへは出息所も思ひ
あへぬこゝろしきれハいふく
ゆるしきこ
拙しきまるへき 葉末
よつきそくちまふを源の
とゝめあふこ程のまゝ前まを
とめまひしるあるへし
月をへぬるまや 細七日な
きハ上の詞よ和やかまさし
出さる夕月夜とありしに
あへり 呼孟月
こゝら 細拙しくのんそこ
らとハそれゝるをいふ
こゝし
つゝさもきえぬへし
細浮息所のうちにもき
えぬへきこ 明 意浪心中
和平事 工霄清詰又成霊

見さりし時のやうなるを
拙しいふ あれと拙しぞうくこと
ぎりなし きしりこ明さ紀拙しけ
て 拙 源 なきまぬ 拙出息所のんこ 女ハさしをこえしじと
拙しつくむめれど えしのひまそぬ出さし紀
といふくんづるしう 源のこ 拙しとまるべき
さ海をぞ出さ給ひ月をいりぬるまや あハ
きけるそらをながめ川くうちこきこえ給
まこ 孟 拙
よこゝら拙りひあり見さ海つるつゝさを
きてぬべし 細 やうくいまはと拙りひてなれ
まへるよ されだまと中くんうごきそ拙しし
そぐる 葉 拙 公 生 ぬ上のわるきんぐらなどうちつれ
てどうく立まづらふなる 細 拙 夫のうしこえ 座のこゝむまねも

されたよと申く 細 出心の引とこ 拙 是出息所の心中こ 前よつりもう雲のうちなれやな
どありト國を定まるまひしを此比やうくと治定しうこ それよ今又源の拙して拙
しとまれとあまバその方へ心の引こ それを出息所のんにもかやうよんよいうらんと思し
よまことよさやうにあるよとしひこれまふ 師 源の拙せぬさきの拙しひより源
のゆゑしてかうかつりて出心うくとこ
殿上のわるきんこゝら 細 葵巻よ殿上人よりく 鶴夕の霧分ありくをそ此の役よなんもうと
まをさえ

げよえんなりうこよ 細 いて拙まるくわまこ貝へ
うけぐりしうありさ
海なり 拙 拙を思つてもんこ
ひよ きこゝ給こと ぞをしびやら
んこなし やうくあけり雲の氣気と
さらよつゝ 雑とうこえしやうこ
ぞこゝるんやうなり
曉のまれをいりをつゆけきをこはよ 孟 世に
ぬとなり
よしらぬ秋のそらに 源氏のこ いでぞそよ出て紙
とゝへてやまらひこまつる つゝじうなる
うし 風 そうのさ海こ
ひやくうよふきそ松虫のなき

曉の 細 源の奇こ出つゝり
出さう横なる 曙 アケ 夕 の気こで
うちの身みも志こ給へき
を此時のんしやりて見る
へし 花 曉のなりうまし
夕ハ白雲のゆきそまひし
き別せまりや 悲こ
大底 四時心惣苦 就中
勝断是秋天 秋與白
師いけも曉の別ハ源よ雲
ひきをと朝の別ハ一入紀
も雲ひきのもろこ

不定なりけり　抄　母君も木のそひてありけるの不定なりけり今宿直もさまざましくさまで

何とも今　細　世の中のなきなへき所へんとつけてまるへんとて一向稽古なる身ハやまさ狗くけ御く参前ハ何事も人よぬきおやまんならば此際の事のこ近身の難なく

かつら川　細　西河の御祓也　花　秋文稀なの日ハ又西河まても御祓のなりわり　桂乃なへく中宮御産とあぶらすある　未明日

さ海ふくらみてひがしまつじかなよしもお
ぼされど、おはくしうろうさ君とのこ
なりしておさおしき方の御様と、いまつ
めさるんやうよ。ほどちらくなりまくおゆき
みなげさ給ふ秋まいわつされんよ不定
ならつられぞさらのかくさぶまりゆくと、
うましとのこゆかりしら、世の人いましいおき
ことりさくさも表みも海ぐくよきこし
べし、何事も人よりごくさあけかけれぬき
もそやをげなら、中々世よぬけおぬらん
のれおろハぞろをきこしゆかりくすん十六
日かつら川もそれもく志まふつねの式

まおるし　細　花の下にて　ちぬ云　稀なの日御前と勅使と八河原と云事して陽明家　長奉送使八御幣まて御子まて上路の時ける湯殿ふそろうれなるく御下よの中も参を中納言参議　同一人役

宮之紀御　細　殿の御心せ　故弁侍の比みやへ陵の中へかし上路しまく表日

なまくも　細　宮は秋文へらせ給ふ所て中おもをみれるんとの外

ならば云んにし　細　此里中ををけのみは秋文ありれなき天の宮からぶらくなら秋もさかをかいくる秋の八のんその影　来日

八幡かり　細　宮と秋ハ地祇とす也山祇とかやく山つことと深く地祇一切の秋

よまふりてちかくかぞうしなどさくる
んどうらめぐやむじろかくゆがしおの紋え
らせまつる給の中てろしせもおれバかなく
しおふほど大納言より例のつき
こくと中くまうりけ海くそりしこされ
まへよそゆみよつけくなう絵ぶふ
やし海のらくるよ川こ絵をふおはお
ぬまれの中をこえれどひまふるよめ
娘うらしねられとおりいとさはしらほど
なれどれくへまうふるまの代どぐ女別当し
てうせるまつり
秋好中宮
かよ川ころそそろくしくもろ中なるは

といひんとあるに 明日明 伊弉冊尊生淡路伊豫統紫臺 股薩摩 隠岐 佐渡 淡生大日本豊秋津
洲謂之大八洲 師 我物ニ為 此奇ハ奇宮を国使とうみを比して云ニ わがあるゐ歌きとり 答
あれのみく
女別当 細 歌文の別当也 花 延喜式よみたり 唄 その世ふと 淡文開白 ケ ゆるしは別当の局
とてあるに 五日 師 歌文の友女に
くるつゑ 細 なとぐりことゝハ三将の俗とそこにはべきと也 孟 なとぐりことゝハ其実のみにて
ハけきとなり
なれぎりごとをまげやうごとにんたるハ 奇文 此息
不ゆるの素由のこゝ
横ゆしうそぐらふもまつくまりしうれ
をどぐらもそくれてこをくらんもひとも
ろきんらしこまへハ ぬがしこまりてつまく
よなりめぬ女 歌文 のはうつり 恵ゆくれく
しき紙 原氏の 歌文のうつし
ほうそこゐこまへり はとしの用
とりハおりしうも ぬもしへさゝなとこゝろ
らせ やうよれいよこゞへるまづくらしさよ
なるこゝろうはくをまていとよう

いけるさ此程を 細 此息
ようらそひてあらまし
ハ此歌文とも宮ものそ
ろうへき物とも也 師 歌文
いとあるくゆるせし時ハ此
息の方よ枝をせしかゝく
源の又多ふへきけるよ心なり
くてさもなりしをねこき
となり
世中さめなれハ 細 又も
逆なるもあるとも
妙こつゐよ源のこゝろを
給し 此代のかりめる
とよハ斎文かりかゝれ
さるのときようらよ とも
より申の時てあるしけれ
妙 斎文 群行の日素内の
里てなくよ此りあるを
此息の此あしよ 花 歌五いと
きなくかつします内ハ此乳
母いさきなるく 清輿よのう
こ今の歌文ハ十四よなり
女 花 此息 そひて下り給
ふよりて国輿を西へま

こゝそまつりつべかりしいまけるさ此程
どとこゝどなりぬるこそねこまれ世中さぐ
めなりれバこゝめすやうもありなんかし
かどぬぼをふ 細 此息の物しかりみたり
ばりのぐ車ゆほうる 田なりぎるの時にうち
ままつり給こゝやもこ所にうしよのり給へるに
つけてもぢ 此息の文 ゆくじのうぎりなきもとぢよ
ぬがしんぎしていつきしそまつりあひしを
さ海うらうて ぎ息の世ようらとこ給ふも
物のこつきとぐ 此息の心よ
こゝ 前坊 ハタチ 十六よそ
ゆりあそ 世 とられこそまつ
ゆまふ 歌 そぞ ふまここ 九重 のへをこ給

殿上人とて　細　俤島帋の俤方の女房は花いひつけて殿上人もあるべし
二条よりとうゐの　細　二条院のそばのるすなるべし　花　秋王家興船訓に至八省東路南行
至都芳門路東折至義福門南行即出東掖門經二条大路東行至京極云々
とり捨て　心つくしもきりて　俤島帋の下つきまゐるも八十瀬の海とまことにおくてきりと
主独はぬしなしあくんとて源のるとも知りしたくんの心をふくめまくり
きこの日　杉　俤島帋の巻半　淑田の私宮よりぬりしたるべし　所　淑田私宮八の秋　文の山顔
の御を徹して給はるは物まめ
ひとりの所のかしこまるは尺
をくりの海　細　ゐれくぞ
はぬれもせよぬれをもあ
まりかおもうもぬき
どとも思ひこそ人はお
らしとうらうらんあり

いとくらうものさはがしき程じなれば
の日　細　抜の実れあるこ　きりそれ　人しあり
俤島帋方　きぐう　所　八十瀬のるまはぬれくぞいせ
まぐれ　細　藤の中なれぐ
つらしも出ていとよしく思くなまめきた
なるおもひ　源　おもひなるけ　ぞこしそへきまくる
ましばと　時　わらう　物思の余気なる中
ぬあしけよ　源　ほのか　ぐらるながめてひとりご
ちかすす

物うきと　細　源の事と面白
きあるべしと思ふ　孟　俤勢のうきなるめやりて
のうこしなり　所　南院の別
ちりよあるとて引き
と思ふ
みやりなるに　杉　思ひてと
めあらぐ　俤島帋もとまり
まふべきとまちうよ思ひまふ
命ありぬ思ひとこそ
孟　泰の御方
孟　冷泉院の御方を御遣
云せ　山河未よ
給つつ世より
所　俤の御方を世ありつつ
す杉本と語ふまく源
とりてまし語まくとこ
出しろこゐ来崔院のう
しろこゐとこ
まちひの方とよ　も
一　孟源の年齢ありもれ
とまことまとは故をせんか
りくなりとのふく

源方　ゆくことをながめをやらん山れもあ　ゆ坂
山をきりなへぐそそ　細　紫の上の方を
ありで　ひとやりなしぐぬさびしげなが
めらし　孟　第三段　細　まして　所　俤島帋のうきに　ゆらんは
でしなりこと　給ましてこびのそしゆらんは
神　源　月よりなりてゐいとをとくおもし
まして　世中よ　源　おしまくぬ人なり　所　東雅院
をぬぐしなげきて　所　幸ありまくきは
心らゐを　東　文の御しをとくやうしさせ
あてつぐ　源　ぞ　ゆ　ぞ　源　ぞ
ぞぞ小のこしとそくぞぞなまごともは
しろこと　源　ようとひの程よりを代と

上御對面之間有五ケ條御
一者可專神事二者可仕
法皇三者可聞左大臣訓
四者可哀古人其外一
ケ條御忘却春宮御退
出之時左大臣被奉向之
非記正文取意 孟明曰
いとりのちうるき 冷泉院の
いとあうくおくしまれをうし
ろめたく相帝のおりしめ也
細 友壹の御心也
孟冷へ様くのすを云作た
ぬさすくおりしませいなるよと
ことまなくおとなくおりしと
うれませかひぬ 細 大后の
まつり給ひさ 之れようれ
まつ 御心をてへし

わう御世のおなしことふて
花 御位をさりて世の政
を行給ふ事 將軍を皇
御例也 後々の世ハ連綿
也 明孟曰

ぬまつうまつりまべきにこころづかひこの
細 長さのすと
こやのれうしあとしまべきこと給へ人もとくの給
つもて 長さの還御之
ふけてぞうへしせ給 のうろ人なくつ
うまつりて のくしろさ海 朱雀院よりおくるを
けちめなしおろぬ程まてうへしせ給を 渡のふ
じうおぼしめ 呼込徽殿之 皇太后之
ぬほとゝ給ひ 紀もまつり給ひ
んとも給ひ 中宮のうくそひおりしかよ 疾妬者之
とうれくおりしやもとらふ御とゝ 院の御脳之
きさ海ふもおりしまさぞうれさせかぬあし
をそくよ心まどふ人ぬほうり 御位をさし
せ給ひいふさうらこそあれ世のまつりごと
どしげめさせ給へることも わが御世のおれし

ぬりちゆくぐ 細 二条大政大
臣也 仏徽殿の父也 明花 二条
大臣 仕相國 越引入左大臣
元慶四三月基経ハ仕相國
越左大臣 源融此例也

のちくのおわさなとけう
し 河 器事 日本紀 論語
孝事 孝養の事なり
何七日くの御事なとの
孝養なとも相帝の親王
こちの中にもくれて源
のつうまつりさまふて
友の御そ 細 何云服者著
物也 明本義ハ藤皮にて
織まり布也 御素服に用
布此事也 又上ハ以日昇月
とて十三日著御して全脱
御也 又裁麻とて麻布を
用也 俗の其しろ思ふも
仏の御服也 素服事仁明
王皇美和七年盤觴歌

ごとふく ぬちしまいつる給みかどいとわう
うおりします 朱雀院の祖又右大臣也 孟急 孟不
良
がなうおりして その御まくよなりるん世を
いかすしんと上進ア殿上人ぞれおりひるげ
く 中宮 若つ御 源氏之
ぞ殿なとハましてもぐれてもの
とおりしまうれど のちくのれわざるどけう
じ 川うまつり給さ海も そちらのみこ
こちの御中にもぐれまへるをことちりなが
らいとあれに世の人もこそまつ ふち 源の室
の御そよやつ思ふまへるにつけてもうぎり
なくきまつりにちろぐるしけなり こゝぞ 花 玄宗ハ
葵上のすと年父うろうるへ 細孟曰
こそしとうちつゞきうるることをこ給に

可易何日
おぼしおかりけり　花世のうき
めくしぬ山路へいらんよは
しふ人とそおぼしなりけれ
此年九日　細河ニ七条后う
せ給ひ後伊勢　坂さ河波
あまのこまさうこの中に
とうくみ云松の紅葉と今
いとのうちりくわれなは
うと

世もいとあらきなうぬぼさるれば
つゐでおもまぼしけるとはあれ
どおもこさ海ぐのはおぼしぬ
九日まぐは女はこやもとぼしられ
つぐひしまつりつるとおぼさぬれば
よまうで給ふ　細七七日のうち　拜日
のよれ申とぢむりそこのうしのよつけて
もまして　中家の　坂つかく
しめなり　坂　公徽殿
へまぐばらろまもせしまへしん世のうし
しるくすこうしんを坂ぼしとりも
相帝よ
きこしまへるとしばのはありさ海をしい

弱なり不ありとこそ
れ可易本記ニ
おこうしん　拙　坂壺のわ
は身のうへよりも此門の
ますをおぼしなけくん義
ハ三条家よりとりまふ
人よ兵アマ　盃　坂つかの三条
のこやへ流りまへは此兄弟
まいまつりまふ
大将殿　ゆきこよまつり
拙　ほるり　見も此程は此
中よさふひまふべしこる
ことは坂壺の　ふんこうう
こと

けひろこ　細　以院比松也
くくちうくよなくさ海
こ松やくれよりんと天や
うによく給　殊勝也　ふと
明河松は君子ノ樹也

でこそしまはぬときのまるきよ　相帝の院よ
もおもし海をまじう　これ得かくへと　細
程よ　ゆるしきことうぎりなし　宮ハ三条の
里亭と
こやよまうり給　此むくよ　兵アマのこやまつり
しまつり　ゆきこうちく里風を出しうて
院のうちやうく人かれゆきてしかや
かなりよ　大将殿　ゆきこよまつりまて　故院の
事兵アマと　此物語
きは物語　ゆまへのみえうの雪
よ志明まて　志こ　坂　かれこうとこまて　みこ
兵アマ
うげひろこのこしおやかれよ人志こ
ぬらり　年の雪　かまよだうりのこと
おもあらぬよ　おりうしのあられ　ふて

さえまさる　細　おもしろきは
うちむきさゝる錦くおゐ
の御よそひく花のいろゝや
うちとのかの御氣やうそ
面白し　河　不如意　御池亭
を流るそ　盛　池に氷むすぶ
しもがれの後まで氣ヽし
そこかしこぞあはれなる
むかし　わりなくおもうそあるや
哢　もしわらはの御前庭の
思のやうなれどおもしろき
ところぐもぞ池　整備
の方よりむきさせ表に
し
ものしれて　哢　よしけり愛る
されて
わらはせ給　中家三条殿
へ所路の儀式よりなる
へさせれけるし
此里をし　細　今八此人々や
うちとけ愛をまして
その時のさまを
なりしなりとおもひは
かわすく

（源氏八）犬君の此袖つゝめれぬいけのひまなう
こぼれたるよ
（源方）さえまさる池のかゞみのさやけきにまこ
すれしけどをみぬぞかなしさと御ひとりごとまく　細　前の庭之
よ、おもしろくしぞあるや　見そ批判して之　中文の来客之　倉帰
とりくれていたるの水色こほりとぢ　全盛哉
うひとしげのかせもめづらしきをつゝまよひを　細　前も前之花文の筆
此御心れどそのときさつくべきこともはべらぬ
らせ給ぶしれそれにしめどもおもひかけまし　細　三条さま之
れてそぶらひやはりてよびのくちを給　此ましろおもむき　前も此之所者の哀れ
みもおもしろくしてまかなう月の御どれ　細　源氏三十孟日
かめぐしろくべしとかくなりあれど世中　花天下宛国

ちりくれしろ　勝石九除
月かむり國くの司をさだむ
の源はにはいるしして門前
おもかりくあつまりしれや
院の御時をかざりしつい花
御生住の時八木乃卸者権
院御住の時と院の御室
世のありさまいは源の威勢
おりそうつりしまく
御門のおもてり　孟　二条院の
門前之　花　門前零落　車
る錦けり　琵琶引
御源の威勢院崩御の後
かざろくしまく
院の御思ひはやさとある
細　院の御あまりの御恪の
うき花はあてえしきを
國よとに勝月秋之御の
とに御勝く孟日　哢　院の御
四人よや張ととおす

（源氏之）まめごきいとかく思ひかなう大将殿は
りのくしてこおりぬとゆつりぢかくのこ
ろかなど院の御時をいさつまもいとどぞ
ごろかりけぢめなくてみかどのまうりど
ころすくなくなうし　沙門　馬車うらそう　なまぐるま
ぞそとのゐものくろわさくさし故さ
しきけいしなりさるはいそぐこともなげ　細　三ケの一也
　源の御九条　司之
てわりをと給はもはかりくしそえなり
源の之　連々之今まりもろわかしとおもえ
さひやうれてよのもろ御どくなんみそげ　細　勝月夜之　御遊
とのいは二月よかりのやまひかるのね院乃　尚侍　きさいき
此思はやうくかはりなかるめるうらぞかり　首殿
そら頻んでらずくもそすて人かしもいと　勝月夜の御之

后ハ里がちに　細　弘徽殿の
大后之大略里がちにて
ありますゆゑ自然の御局に
ハ梅壺を御局にさだめ給ひて
ハ弘徽殿ハ尚侍の住給ふを
住給ふ
とうくわでん　細　登花殿ハ
弘徽殿よりも奥也むかしを
わすれ給ハぬ花やかの住居
に埋れたるやうにてありしに
女御更衣の方なきなれバ
河　登花舎梅壺也弘徽殿
登花殿以上后町西殿女
御等曹司也　哢　朧月夜
の登花殿におはせしが弘
徽殿へうつり給ひてはれや
かなる也登花殿ハ弘徽
殿の北にあれバむもれたる
といへり梅壺ハ登花殿
の西にあり何とぢこもり
殿舎也見花鳥
いとしのびて　抄　源氏
細　今ハ大后おそろしの御中也
源氏の御心也

よくおはすれば、あまたまゐりあつまり給ふ中にも、すぐれて時めき給ふ。后は里がちにおはしまいて、まゐり給ふ時の御つぼねには梅つぼをしたれば、こきでんにはかんの君すみ給ふ。とうくわでんのむもれたりつるに、はれ／＼しうなりて、女房なども数しらずつどひまゐりて、いまめかしうはなやぎ給へど、御こゝろのうちは思ひのほかなりしことゞもを忘れがたくなげき給ふ。いとしのびてかよはし給ふことは、猶おなじさまなるべし。物のきこえもあらばいかならんとおぼしながら、例の御くせなれば、いましも御心ざしまさるべかめり。

院のおはし　細　此比ハ院の御
門の御心にかゝり給ひしを
后の心にまかせ給ひて今ハかやう
にはかにつらきことをいでゝ
とぞ
左のおとゞ　細　すべてにつ
みなもとのいまの御かたのひとを
さんとぞ
みしり給はぬ
細　月ごろ源氏の世
のうさとなり

こ姫君を　細　葵上を朱雀院
より御所望ありしを
まゐらせず源氏に定め給ふ
也　哢　同
おとゞの御中　細　右大臣葵
そばそばしく
上父と大后父弘徽殿の父
とやそばそばしくハかどかどしく
なれ海河に…文選
見八文選西都賦上…

院のおはしましつる世こそはゞかり給ひつれ、后の御心いちはやくて、かた／＼おぼしつめたることゞものむくいせんとおぼすべかめり。ことにふれてはしたなき事のみいでくれば、かゝるべきことゝはおぼししかど、みしり給はぬ世のうさに、たちまふべくもおぼされず。左のおとゞもすさまじき心ちし給ひて、ことにうちにもまゐり給はず。こ姫君をひきよきて、この大将の君に聞えつけ給ひし御心を、后はおぼしおきて、よろしうもおもひきこえ給はず。おとゞの御中も、もとよりそば／＼しうおはするに、故院の御

又后若御后にして后腹
とやいふらんと
斎院はかはりて　細　院の前
斎よりしてかはりて斎宮に
后腹の女三宮の斎宮となり
し斎院のことし　明　桐壺
帝第三皇女
あさかほの姫君を斎宮によ
の給ふ　葵　槿の斎院は桐壺帝
の御弟の式部卿の姫宮なり
かくて七日の服三日のいとま
されはかゝる服は日数
とるべきなし　孟日
またのいつくよりはそれつう
河　孫王為斎院　真子女王
雅彦親王女　文徳御子中務卿　仁和五年二卜定
孫王例此一度歟　愚案
花鳥　穆子女王孫王斎院
の例とあまり帝王系圖
を考するに穆子は光孝天皇
の内親王にて斎院となり
まつるとしてあそれは花鳥の
御説可然に　細　花鳥
の説可然延喜斎院式に云

なりて斎院もおりゐてかはりにゐ給ひしかば
わかき后のひめ宮をさだめけるに斎宮にたゝせ給ふ
とのいはさせ給はぞ　わりなき事におもほされ
ことあるべきさならねど女みこたちもおはしまさね
せざりきんだちのかたちも月かけて御覧すれど
うちは祭をさぶらはせつゞきて上達部などの
かず給ひぬれはかゝりしと世をかけて中将などよ
つまほしくもおぼしけるをそれにつけても
よそにてもおぼしめさるゝにめぐらされ
とぐしよろふとも御覧しつゝ乃
ちるをみしものにこそ給ひぬべきなれ
よろこびたるとおもひて世にやうやうみせと

若無内親王者依世次簡定諸女王卜之　花　此物語の習延喜已往事例よ引てかゝれはのすく
いとのかく書くせり孫王の斎院よ定給ふ　穆子女王真子女王の例は理乃例よりかくなりよ
とかく
うらすぢごとよ　細　斎院よ御給へ　孟　斎宮よ立給へは神事を怪みて
中将のおもふ　細　斎院のつひの女房へ　師　あさかほの女乃女房へ
みそぎは院の御方よりは　細　源氏の御手をそへられのえさ院にはれたまつよ
このあるさよりて后の御かはすくなかりもまくさしくされは色くかくさひくまで
うちまでには申しさふり世が手はいつかは大后よりかくまかくゐてよまで
つらくまへはかりまゐいは下はゝくらこそすて卿よりさあまりくし世をに仕へり河
史記云孝惠為人仁弱

は院の御遊びあそばれよおほされ
どかくやはしまするもかくれなき　孟　巷
さうさるをさそつさきまゐらするね
かゝるべし母后あれかゝゆくぞよ
とれくるよかへせむいときかゝさせまかうこ
さのゝまれどかんの君は人をこれぬれにて

斯れさゆへとかく
細　弘徽殿の女后は大后よ
御後もかくいひし一帝ぞ
かとありけくすく

あうんのみもとわく
河五壇修法 降三世
軍荼利 大威徳 金剛
夜叉 中央不動
称名ニハ流派ニ云ふ中ニそ
行ふ事ハ不動中尊ニして
五大明王法を修らるいう
めしさるう 一字中壇御修法
為ス御祈祷之
中納言の君 細川勝月夜の
女房源のえうろうえと
ようろうらるるといっておん
孟勝ハいもくしきうとこいひきと
心ニ仰ヌ伝ニ勝月夜のふるくし
く文字ニそらして帝の寵愛
ようれ源氏ニまうてひろうれ
中ニ源氏も公人ニ年せと云れ
源よ次第のうちうちもうろ
帚木の巻ようおしうさゑ
さいさめそてまささいおら
ん女よんどうせあおやすら
きそえん人のさめくうさ
ゐ名なども、そつくさ起きと
山ゆく云ておいをとかそ

ろくしかしんハにうちすくてもお身つうすく
いあしん、ぶしんのとの渡りくのらしめさそ、
川くしこおうしやすぎかす衆くらしひて、例
のうのもうまうさて給ふの昔ゆかしくら
何そどのつかめよ、中納言の君ゑまいらく
かてそいれそもうしうら、人めとゑげさせ
かれハつつみうちをうしげうなるを、窮場そ
ろうう美也、終夕ようてまうろひとぐる、
あねはき海されハあしてめぐらしさむ
よのをあかはふひめれいうそでうハもうあう
ん、女の泪を梅もげおそめぐらしされさう
なう絲りうるうちハいうぐおもく人帰りけ

孟勝をとりこまきくし 密通ありし 細川勝元源の 朱雀の之 勝月夜ニ命ニかうく 細川勝元殿のむそとめ之 源とし 中納言にて 細川源のさ面に 勝月夜のさ面に

うらみよしもよのあり
うめ梅 花 西笑大将義云
宿申ノ事大将以下サ将以
上宿侍之中至其上臈臣
申之 殿上及宿一若大将候
御前ニ論次将殿上人申宿
申宿人候由ヲ啓大将於
弓場殿及便殿令申作
立ニ奉ル其音微也
加山羽林出云宿申亥子
時左陣毎夜行丑寅
刻右陣勤之己刻物節
一人申宿申ニ候由所殿上及宿
所申之 麗次将在 今案宿申の来
八そ近大将次将の内御と
のあもうら上宿の人の名を
あらてあも殿上ニても又直
庁ふくもあるもの大将陣参
大征歩の時々先申あるし
てやせんとある由きてとそ
とよへてぞ宿の官人宿
姓名なども、大将ちる
ちうしと作もこのの姓の

かなの海めさわうべきうしうしてみやうわく
きかけらひかう、泪どうくおけゆくうや
とながゆうるゝ、さぐうくよもとのあやさ
わしかとこはぐうふかりかるこのもうり
ようろへまうこの恋ゆかさぞあるべきうく
ぎるなうへのもとへおこすうそうと、
だるハうき絲をうしさものうしらげうつ、
こうしこしぶるありさそぞしひとハとあ
かう、女まハ
むうしうるうぐ袖をぬらうそわはくとを
しうる遠ようのけくもとの絲さ泪、うるさず
ちそりとかうし

河ニ東の お浪あり 源氏ハこ 源介之 宿直司を宿申人よるひ 寅の一刻之 勝月に 何と飽ニ云うけてこ 勝月のさ面に

ゆうをくいかゝねをうれよ同じとも仏前落よりつゐかをまづきのうくらくうちかなれゝ
るゝ人今うれをこのるゝの事人をくゝうらをとゐるきく仏
るこのありよわうくうきとハクうり寅一いたをの宿直（トノヰ）（トヒトリ）
ぢこうぐうくこもみ去後悔よ着ぐさるう
のくれゐ後つるうゝあんとそをゝをくゞ
いうくらゐゝうれゝゆうくゝきくゝ　時日
まこ江ゐうくうりようくくこの西ぢくうぐ
ゝうよゝ御の外よ仏ゝうりよ近東司のくれてありくゝとまう秋くてゝ
所仏前の仗い事紙の他去事うてえくゝうゝ細仏東楼中よ寿ゐくいなくて近東司
のゝ乃何ゝもうゝえくゝくゝゝゝうゝ寿うくゝくゝゝゝゝ
くれてもうゐゝき物ゝ寿月うゝるやゝ
わゞよ秋月のうくよゐうとゐくゝ秋月うくゝ
仗えこのるトの色を寸ゐて御氏の物うゝ仏別人の近東司と乃てうゝうよえと添て
うくゞさなゝきうこのどくゝ物ゝもうぞうー　秋
今うゐるてゆくゝれぐゝうよゝのひつゆゝ
ゐうやとうゝようこえくゝゝゝゝゝ
めり時一後ゝのゐくゝ　細　兵を寅一と告仏うよゝうてうゝ
てゝありぐそうく神をゐくゝゝゝゝゝ
なびきうく　細　仏のゐ（開）
と人ゝゐくゝるゐるゝきを
仏うう秋々うくていゝ仏
まうきゝゝ也　時日仏仏ゐのの
ゐくとゝゐゝのうゝうゝ

ひねのゐくゝ
なびきつゝわうゐうくてもくせゝや
（別のうゐし）
ゝゝゝ仏ゐくゝ

てぐくゐひねゝ秋ゐうくゐありのきゝ月秋のえき
そぐうりわれうよゝいてゝうやつれて
（源の御）
みるゐひるゐ
（ぢ）
候ゐく第ゐ
ぢゝうゐ出そ月のゐうくゐ（曲）而ゐふそ（之）（蔀）と
（源のえま是）
このりゝよゝゝゝゐれぐゝきゆうやゝうゝを
（源氏ぞ）
ありゐんうぐゝやうのてようつりてをぐりてて
（源氏ぞ）
ゐれつゐるきんのれんをゝいゝでうとれ
（花ちるを見うとうれゐるきん）
りひくうくゝ我てうのひくうくゝ
（細　花のゐ）
そいうくゝゝとゆぐゝ後ありゝ
うゝ仏ゝうくゝゝゝゝゝ

せやつきぬらん
細 秋せや清きぬらんと也
おいざりし涙のもろく成
行ハ世やつきぬらん 樹下集 花
きぬらん
おぼ寄不及引ニ

としあけく。ゆき屏風のそざ海は何さひ
いりまぬ。めづらしくうましきにもなる
ざハゆらて。ゆきそまつり給。る紙いとく
ことのまと
ゆしうこそあれ。世やつきぬらんとそ。と
れるをそいぐしまつるうさもらめいひしら
ぞなまめかしうこ極。ゆくざものをざは
とてまつりすへさり。もとのかさなどに
を。なりしきさ海にてあれど。こつれ給
ちず。世の中をいとうぬぼしるやめう
事をして。のどうになりぬいりこまへる。こ
こうらうしげなりりんざしらつき。
ゆぐしのうらうさ海。うざりるきに

としあけてこしかしれまつり
ゆうを
源の心 紫の上になくさみ
て 花のるをもとうしかひ
まれまつりしか今いよ
く紫の花蓋に似まへ
るをみて源のかわせ也
もとうし物思のそうけ所
細 紫上をこえん時花つれの
志しさをなくさむへき
るやと思給給 時日
る紙りきりなく
樹 花蓋をむしりしかし
ひしみをるなりや思
ひなしの別なりしこ
画日
心まとひして
源の心をゆきあかりて
又花の山下のうちにつ
こひつりまつる

りさなじ。こゞのこいの姫君にこゞふを
ころなし。年比をこしかひまれこまへ
里つりと。あきましきまてゆゞしまへるな
とこまふまとに。もとうし物かひのちうけど
こうあうこうらし給。ゆこうらうしげ
げなりさ海などを。さらにこと人と思
まきゞこゞさ紙なとかぎりなく。昔より思
ひしめ学してしかのかひなしまや。さ海
ことにいこじうねびまさり給にもうり
なとこゞひなくゆゞしまに。心まどひし
てやとしこ根のうちにかゞつくひより
て。ゆぞのつま紙をきなくし給けるひ

式アクやうしや　細　式アとそ
としよりころ人あまいし
嗟式アとそ老ころ女のあり
とそれがやうに母名のなり
まいんと思ひしのまゝなり
あ去気いと思ひくましませ
いこころのかいこんとあるを
尼のるゝといふりまくで
俗に年のよろんとしひ
てのまゝ
いかそうさは　細　何かさやう
よハ此ゆへきそと去気
やうそなしうへしての給へ
うこへそれよりもみしうて
花式アハとしよりころ女な
ほそ髪が落ちそりころ
へしそれよりハそしうさを
いさ母尼のまゝをいふるこや
よゐのそう　河　和君僧
内裏の二万にさふらひて
来しまゐらしが持まつる僧

て得らしバいかゞ此ゆかさるべきとゆへしこゆへ
ぞ　これ（去気者の身をさしかへ）とうらまりりまて　式アクやう（重文の御伺へ）
ましや　いかぞうさはなりこ海ろんと思ふそ
の給いふ（若君ちまへ）あらひなくあられまて　これハ（先）おいそ得
まバこうよ　ちさぞ　さはあらそ（式アクやうに年よりにあらそ）ぞこそそれ
よりもこゞうくて　ぐろきこゆ（黒衣へ）たゞとさそ
まゐのそうのやうになり得らんとおれバ
こうそまつらんこともいとゞ　細　絵ちうへさしうへ　孟同
こそなきしまへゞ　まゆらうて　久しうれ（去気御伺へ）
もせねハ　思しきゆとそ　なこうのあつれバ
ゞしと　ゆかしてさすがにそむきまつる　ゆく（去気の海）
なりしハゆかくとさうしゆくまこのなりし

げに匂ひまつるさ海ゆとなりゞ給まくよこゞう
の　細　源よく似給へ　ぬぎもべまつり　ゆ（歯）のもこし
ぐらて　ぐらのうちくろこそ　おこまつる
かりうろくしきは　女　細　女まつてへ　孟　冷と後のへ　そまつらま
ありうきしきなり　いとうくしを　源に似まつるへ　ゆがしまへ
ることそんうそれと　おのきずに　ゆゞ　さうしを
世のまづらしさのそうゆそろう　ゆゞ
給ゆかり　ぞ　源氏へ　ゆゞ　細　衣蓋へ　孟同
ひきこそ　あきましさ　細　衣蓋にもひ知せまつんのへ　ゆゞ　ゆゞ
ぐそ　ゆゞ　ゆゞ　ゆゞ　ゆゞ　ゆゞ
給んじつてもぐし給ゆ　人ゆうくつれぐに
ゆゞ　ゆゞ　ゆゞ　ゆゞ　ゆゞ　ゆゞ　ゆゞ　ゆゞ　ゆゞ　ゆゞ

おのきずに　細　源に似て
まつるを　ゆゞ　ゆゞ　ゆゞ　ゆゞ
白圭之玷尚可磨　毛詩
抄　玷　名ノ　ヒストヨム

雲林院　細　河海岸ニ淳
和ノ離宮也　望式部ノ墓ハ
雲林院白毫院南小野ノ

菫之墓ハ西也寺治宰
藏日記ニモ紫野ニ
雲林院ちかきみくちうち
ふく紀紫式部が西白き所
あらん俊人のもとえ
立よる木のもとにそのひら
ありく紀紫ちる所り
など遍照の涙ゆかし
秋の夜のなるまめかしさう
秋のおよなるまめきさそ
るなるとへしあるらう
そ花もひとくときぞ

うき人もありそ
しのびての月をえそらも
人もいそ立しうゝるの
るをぞひまひとなり 弄細
引哥同

院によりてあり。故母はゝ卑所の墓を
うしの律師のもとにある治ふく法文
かどしもえ、ととるすひちんとねがひて二三日
ばかりはおもひれつゝとめ侍り紫
のやうく気づきさとりて秋の灯に
なのめならずたどし待つかうさとを
もとれめぐく侍るゝ法師どものざえ
あるなるのいそく論義もきそとし
めでたき世話なるゝよいゝど世中のはかなさ
とはかりあわれむぐすべうさいへるをぞと
出しはへるゝどもあげゝこの月は新は深う
しるきのおもひとそてまつりとてかく

さもおもふきたる
源のうくこうらの家乃
此世をつ遠くまかれ母の
世よりのりきをとあふてわ
が身のおわりきかきさをなる
く観念ありつく
念仏衆生摂取不捨
阿觀无量壽經の文也

らしつゝうくの花ここにさうそ紀紫かぢとし。
おもひしらるとちるみるれど、昔この
いとるとい此世もつれぐすくは、なの母
のるさのりげすりゝさもわらさをてゆ
身をすてなやむゝかなどゝ覚えつゞけ侍、
律師のいとうるさく思ひて、念仏衆
生摂取不捨とうらのべてとなるひめへ
るがいとうらやましれどもやよ涙
しなからまれ姫ぎみのうるふうてぞ
いそれ給ぞ、いとよろこびたまうや。
世いするねりうども侍つるすくのこれ
かきられぐはゝるぞろうぞちげうとえて

木綿と繡よもうをとらへ師神社の人のくろ　ものされハうゑてやも然わうと云へんさ
め由ゆぞとさとよこそまうり　細安渡考うあるよ付きくも系きこと人ぞのことの秋と
ハ紗かなうし附文叢巻よ高信路しも秋之秋ゆゆわゆらしハ面いつきけ里とども
高班がゆうの人々権よそしまうり路宮がさ事なき出む秋よ紹わうりせどと八安渡
なれハうひるさうしや　孟飛曰

高と今みて　紅山のへの
あつのさとまきさくら也
高と今になるものしと
くる斎流よ立ゐもこう
さささうつましくいとく
とうへされん　細ようき
も掬ふもぐるやの人く
暁ミうゐもを掬ふもうるや
世中とそうしてふうの我
身と思ひん公ハ安渡の主
路りねささハさうとりと
新路うるや
あれくしなるよ
おそのうへ秋秋ゆゆうるを
るのおりうかよ出さのもの
去発ゆ在高もさ念る
ささくしうる

秋すゆうゆふぶきすうれ芳代ハまゆとお
すひとまよろゐもうひるすくとりくされん　細見林
あのやみてなれくしげようしるあさ
みどりのうへまささ朱よゆふつけたぞし　木綿
こうつよ保わう花
神くしくし
うくぐしう出すてまつるせ路れ人を
細中ぬの差の花うす　師斎流ハきまうてるすくつきくなるき
中ぬ、まきさすつしとくてさうさのと紙
やうすん出つうきぐのまうしにハやひやうゆ　保もと
えまするとゆくとそれどうひすくのを
すんとむそうしうるうどめてゆゆらうて

まへのうへゆふのうさもしよ　細紋院よりハ木綿のまきうりにまうしく
　　　　　　　　　　　　　　細うかき
そのうきやいつでハあうしゆふぶきすさんよ
うゆくとのふんゆへゆへ、ちうらそ世よとそあられ　細川斎乗せハ八まきせすのハそひも知れそえ
えうと
てこゆやゆはあ　ねどうゝくじう。
細ままく
さうみぞがうしうノなうるうちそして綱　細影のうをよせろ
ぞわとわひまうりまへらんしと。もひ屋う
をとぞすしんゆそうしや。おそれこの比ぞう　まうをとなて比比
もとさすつく
し。のくやのおうれすうしこゆゆし
あく。おやしうやうのりのと。徘うるめし
ひぞう　ふぞよイ
う妙ゆさうて。れくをへくうしとぞうし。
細をうう花し
まうるうゆはさうもまあへうらし弁ご
ろハのどうよもぐしまそ。今ハるやしう

まのうし　細　茶の香そのうら乃
秋ゆりわせうしわうとよあ
て保路く　紛　むすとそも
思ひまふべきゆへ何すみう
とよときくるく。保の香よ
来るまもおりしやうなれハ。
とがめてうゝまくなうり。保
武のはん。よさのひまゆへハいう
がとせ
ゆそうしや　嘩　紛すのりで
うろく　師　玄斎の秋ゆ来
の精さの不うて流泉木
よおひまひしるすへ。紛色
をとぐうらてねそうしやを
もひまつく
あうしうやうの袖　細　斎夫
斎沈いつきしも同しやうる
らづしなうとこの紛す
よ保あるするれぞ紛を
うらめしう思ふくやうの
地の往き花るの蔭めす
　明　わやしきやくの袖う
あうきー一枝の袖とまく
徘うるめしう　ゆかまうく

異本 ひかりさすよゆかりてくしとありて石山ハ佛前の箱(?)に書奉の九月ハ斎宮のゆるこ
てまゐらせてしるし今ハ又歎法のゆする(?)よりて我とうつらまふこ
をりすふゆかさは 孟 若(?)よまりおうゆかさはされどもよろこのやうにおもひまゐて斎院よ
からまひてまうよやさしくあすゝ 師 檀の媛君斎院よたりあはねさうこ源のくゝよちぬ
てあるうらよ横をかりめさぬゆ抱とたりあひゆへきと今をちぎしるよかり
あひてのちよとらくしゆかもとハあやしうしく
流とらくあへくるうね
細 法ハ歎法のゆ也法事
ハあろしさるや
もうしのひゆきとよあり
し
細 寡まそ葉を述でる
るくてとけそむしく
時くまさるのゆ也あるハ
あやしうきて律ちる也
嘆 孟 円
六十巻といふ文 細 帝よ
とけしうしくある
と此天台の六十巻のこと
るうへし
ゲギ 玄義 モンゲ 文句 シクン 止觀 本書十巻也 世各
シャクセン 釋籤 ショキ 疏記 グゲツ 弘決 末書各 十巻
孟 本書末書巻ハ智者大師

ゆかりるべきかたも。あやしきゆゑろたりや。
源の
流とりくなへくすうね。ゆかりきんべしとこゝ
あはれまれむとみさりけるゆ也かどには。
えしをりそまうれ此経ましまわりとあ
源氏の
しあひゆくきこしたりらしけ六十巻といぬ
不善の事ゆへ
こまみ。あひゆかぬつうすき。所でうらせたかど
源のうてすゝ
あくかけまし石山でうゝまハいつてもさま
ゆかり
とゆうひゆきしそまうれよ。紅のゆめん
ぼくありとあやしの佃うしゆくまぞよ

作 未書各巻ハ妙樂大師
作 中右記云近日主上学
六十巻ッ給ふ一条院
学此六十巻ッ給創也

あいつゆくあり
細 施ね有人さゆみとの
んなり
去いふもの人ハ 河 紫振人重
あはうき集ういやしき族の
男こ一段 鍛古人ぞ 先て
ありのり人てまいら 細只
よしきんて 鍛らうん
と案うる人とおゆえ
らるさ御車 細 賊者られ
らく 花 西宮おこう重服
又御ハ愛ゞ黒き車ニ今参
諒闇の内よひそうして源氏の
ふる八文帝の御喪やも服
うへ御一縁一服のゆ事と装
束ゆつき車たるへし

源のゝく
うきおもひのゆめゆかく世中とおもふ
でらまくいんこしりのうちめぐれど
細 さるとして
人ひとりのゆくしばしやうかれ
ばかりとえかり海さそをもふとまゞ経
いふりさせ経あれべきさうかぎんをし
信
のちりども。それこりのむかしそのり
功徳善根なりし書る者
びさりしすこしのそぞうとつしく
源のゆ事そ
ゆ経そそよけつるとるとこれぞの
しいうゝへ人ゆ 河 此面
あやしきふるひ人とをあゆま 彼面
まなそ波とかしてさそあやらむ。
源のさむく
されど車のうちでうちの御様よやうまる
かなし
まだいまくよ経をるねど。日のすらゆれあ

白虹日をつらぬけり 細史記并漢書鄒陽傳の上書の詞也。文選にも載たり。家の心ハ源の今かう立身したまふを(?)と治と、あさむきたてまつる當代へ謀反あるべきとのゝしる也。愚按ニ史記八十三前漢書五十一鄒陽傳ニ鄒陽梁孝王ニ客としありて居たりしが、孝王の臣羊勝公孫詭ら、ねたみて陽を讒しけり。孝王怒て陽を獄に下す。陽従獄中我身の讒をのべるとて上書し、其文の中に云、昔者荊軻慕燕丹之義、白虹貫日、太子畏之云々。文選并九藏此文於獄中上書自明一首と云。是ハ列士傳ニ燕の太子丹が秦の始皇をうたんとて荊軻をつかはして後、白虹の日を貫て徴を

よにあひはなやかなるわかうどにておもふ事なきなるべし、いもうとの麗景殿の御かたにゆくに、大将の御さきをしのびやかにおへば、しばしたちとまりて、白虹日をつらぬけり、太子をぢたりと、いとゆるらかにうちずじたるを、大将いとまばゆしときゝ給へど、とがむべきことかは、きさきの御けしきは、いとおそろしうわづらはしげにのみきこゆるを、かうしたしき人々も、けしきだちいふべかめる事どもあるに、わづらはしうおぼされけれど、つれなうのみもてなし給へり。御前にさぶらひて、いままでふかし侍りにける

ぶりを見てそのしるしとおそるとなりて太子畏之とかけり。史記漢書文選の註ニ委あり。花白虹日をつらぬくとはいへども、つゐにとげず、しかれども其志をかんずべきと畏るゝなり。今源氏を荊軻によそへ、冷泉の春宮を太子丹によそへていへる詞也。

御前にさぶらひて 細中宮へ源の参りて夜ふかし給ふ詞也。未春宮の御事を中宮も申給ふ也。

月のはなやかなるに 細上の詞は廿日の月なるべく、夜の深き事を云なるべし。

このへに 細中宮の御歌也。九重にきりへだつるとは、源の間をとげてそのわかれをよそへて言也。

抄 いまの御有様を雲のうへになぞらへて云也。

師 雲の上の月とハ天子の御事をいふ。桐帝の御時と今の有様の御身のあかぬさまなるものからふかさをしめすことのまゝ

ときこえ給ふ。月のはなやかなるに、むかしかうやうなるおりは、御あそびせさせ給ひて、いまめかしうもてなさせ給ひしなど、おぼしいづるに、おなじみかきのうちながら、かはれる事おほくかなし。

こゝのへにきりやへだつる雲のうへの月をはるかにおもひやるかな

と命婦してきこえつたへ給ふ。ほどちかければ、御けはひもほのかなれど、なつかしうきこゆるに、つらさもわすられて、まづ

月かげハ　細　うへハ雲の絢を
ひけるに下心ハ源のことをのべ
[illegible]へ[illegible]
よめり　㖟　此うたの[illegible]中
文の[illegible]月の[illegible]
[illegible]下心ハ源氏
の[illegible]中
文のつて[illegible]乃
[illegible]
[illegible]も人の　細　山[illegible]
めたをへだつ[illegible]も
人のこゝろ[illegible]
人の[illegible]
[illegible]人のこゝろ
[illegible]
[illegible]今の[illegible]
桐壺[illegible]一
源と[illegible]
[illegible]
可付眼也
そ[illegible]　細　中[illegible]
[illegible]起居[illegible]
中[illegible]
[illegible]心ある

なきぞ世間か
源氏の方　月かげハ[illegible]世の[illegible]よ[illegible]ねさへぞ
つるぎのつゝら[illegible]も人乃
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]ハ琵琶[illegible]
[illegible]白虹日を[illegible]
[illegible]
[illegible]
勝月[illegible]
[illegible]世の中[illegible]
[illegible]勝の方よ
[illegible]勝月乃
[illegible]
不佐の　明　不佐の使[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]師　明星の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の感[illegible]細　源の[illegible]

[illegible]のこゝろ[illegible]世中[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
勝の方[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

そらそらう　細　つまめて
さいはいうとこそあよ曲なさ
なりうつのねるうが行も
上ほなるくが皇おのま
紋二うでありやうつよ
つこおろうかの汚は松八極
よとみくうり　哦　なめうう
何くうくりのう寄乃
やうみくくうこうをか
うん
今うくいのれうと　細　六
あうがのれうそうも保乃
やひうらて古後ニ　よふ
らひ添く　孟　妙色のうう
をうう亜て
中天の浄八海なり　細　一勉
云毎年定生うう八あ
らん　哦　空ニ中天のれ八海
八毎年定ううう乳一勤
不生のうう
ちす　細　悞　女　貧
まわうくうおうう　緒を
つむ　勉之　哦日所河三妻
死づくえ　あれの脚はれづう

とをうう　勉よそうう
純や仏具うどそゆう　勉
之帝の仏生う　細　毎　重の
父之帝　中天の又浄ひ
所ははう八八　あうニ日
天きのの日　細　生三日也　彩の仏
なうう日也あ　なその日うそ
提婆品を海をうう
世のつまう　細　仏　仏徴
殿ほうのうれうぐうう
をわれてまうう
勤うう　おる者の日志う
有後のれ仏ざーれ世工
を保うくれそう殿工人
ちまのうくく　河流花蘇
薪及某瓶　隨　時泰散與
提婆品　第　法義経をわう
しるう業つみ
ううくう苦こう救ううて
行基井　お山うと伽陀よ
くして行道うう
うくりう　称名　称名院
山後うう救ううて金銀の
うう松よ待くのうう

てをあくぬれうこごう海なれど、あてよけ
ようこいやひるの　ほのくよう
めうくうへあくねど人よくこくよかせ
まうう雪の志川　阪志うう
なう雪　ううう
二月十よ日ぐう　五日或二日行くうう
じくくう。日ぐよ供養をう世経　経
くうう。めをの軸　軸
うつめ。をの　羅
うう　表　滅
つもうよなう　仏
行くうもうれて志ますう
うくぬことの　志うう
おりませべます　荘厳
ぐうう。死づく　仏
うえの地身いるどまで。海しの

極楽やひや
れくつぐの日　相等
日八後の仏れ
なども。世のつ
紘そで　海師
うくしくう
ぐうう
ううの志とい
もう海ぐくいるどなる紙みうを
のをうねよ　細志死　盂　仏民の小称を
ううくくう　指物をうう

世中にふるうきもの多く
細 せわりハやうく讒言
しきものあるや 師 此附
きよの事の序なり

かどの
二条院の文庫也 文殿

殿上人も大学のも
為大学の中に儒学する志
ある人ハ文大学寮の儒
えらみしをもし

うのすゑひるごとくしなどとおもひくらし
ろ絵やうくなづみさもおさくし給
ちにはこんなあらせてたちあそび
てあそうすと世中ははかなくうきこ
とぞとやうくいひなんであるべし
其の事のかぎりよりあてつれづれなる
中ねさるべきよふだおかすくことをそま
いうまりぬのみもふとのあけさせあそ
まさなくかぬことゝげしだのめたし
古集のゆへなりぬをもかしこくいふく
させまうそのたびくらわざとはおもね
じおぼしめしつも殿上人とも大学のも

ひだりみぎよこ二海とりて
細 対座よ左座ありて
左座右座よられそれを対
座よめしとりて書小
細取狄れ表

中ねまけわさ
勝負の時ハ何よしもあ
るうりなり負くるよ
そ一座の人と饗ある
なり

いとゆかしつどひてひだりみぎとよこ給
どりよろづわけさせまかりけものども
あそびはよろしていとおもしろくこぎ
あそびくまうよろこびんのりだいて
めぐりて若しあつはりせともかぜのま
もふ家くども時ぐらの給は候いとよ
うきれぞしの日どからいつでかう志を
しゝ人給かんするさまぐさしそこは
のこどんよむぐれまん家めうりとめで
笑ひつかさにふけよそり二日かう
かりてぞ中ねまけわざしまつり給しく
しういあてで給めさうらひうりこ

掛物 博士 檜破子

くしの所のさうび
河 鬘頭竹葉ハ経レ春ヲ熟シ
階底薔薇ハ入レ夏ニ開ク 楽天

中将のはこれ
孟 故ハ致仕太大臣 師 中
将の次郎君也

ども、かけ物(賭物)などさま〴〵にて、けふも例の人々
おほくめして、文などつくらせ給ふ。はしのも
とのさうび、けしきばかりさきて、春秋の花ざかり
よりもしめやかにをかしきほどなるに、うちとけ
あそび給ふ。中将の御子のことし
はじめて殿上する、八つ九つばかりにて、
声いとおもしろく、さうのふえふきなどするを、
うつくしびもてあそび給ふ。四のき
みばらの二郎なりけり。世の人のおもへるよせおも
くて、おぼえことにかしづけり。
心ばへもかど〳〵しう、かたちもをかしくて、
御あそびのすこしみだれゆくほどに、

たかさごといふて
孟 高砂 催馬楽律
長生楽破 河海ニアリ
河 たかさごのさいさごの たかさごの
をのへにたてる白玉玉椿玉柳
二段それもがとさんまし
もてましもてましの三段
下略
うすもののなほし
羅直衣をきて下に
単のきぬしるところとめ
しらるゝや
あはましものをさゆりばの
細 高砂八七段の末の文也
の詞也 師 催馬楽に八番
さひらくるこの所にて
あはましものをさゆり
ばのとあるを
ゆりの花のことをいふなり
よりてさうびのあるを
此物語にはかくかけるなり
それもがと
細 中将の哥也

たかさごをいだしてうたふ、いとうつくし。大将
の君(源氏也)、御ぞぬぎてかづけ給ふ。れい
よりはうちみだれ給へる御かほのにほひ、
にるものなくみゆ。うすもののなほし、ひとへ
をき給へるに、すき給へる(源の肌也)はだつき、まして
いみじうみゆるを、としおいたるはかせどもなど、
とほくみたてまつりて、なみだおとしつゝ
ゐたり。あはましものを、さゆりばのとうたふ
とぢめに、中将(三位中将也)御かはらけまゐり給ふ。
それもがとけさひらけたる初花に
おとらぬ君がにほひをぞみる
ほゝゑみてとりたまふ。

蕃薇 [illegible] 古今 [illegible]

[illegible] 細 [illegible] 記者の [illegible] 細 [illegible]

しら[illegible]

附すぞと鶯さく花も夜の毎に[illegible]

[illegible]

[illegible] 貫之

[illegible]

[illegible] 細 [illegible] 師 細の [illegible]

文王の子 細 [illegible] も自者 [illegible]

世文王と八桐 [illegible] 武王

と朱雀 [illegible]

と周公旦 [illegible]

河史記魯世家云周公戒伯禽曰我文王子武王弟成王伯父我於天下不賤矣然我一沐三握髪一飯三吐哺起以待士猶恐失天下賢人云云

[illegible] 師 [illegible] 細 [illegible]

成王の [illegible] 周公旦の [illegible] 武王の [illegible]

[illegible] 詩賦之

のもり[illegible]つゞけり。わづれ

[illegible] 文王乃[illegible]

武王の[illegible]

[illegible] 成王の[illegible]

[illegible] 師の [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冷泉院も源の御子也くれなゐ（？）ありけるよりて成立のあるは宮御身と何と
の給へりしいへ世乱る後は天下を保つ器あらず思ひ給ふ事をしる事を
て八冷泉院を成立よ行はるゝ件の批判なり東宮よりの後よりて位をれハ
源氏伯父にておはします自然也又冷泉院の御世よなりて世の政をも源氏の
うしろみにてあるべくとおぼすなれば源氏爰道のおもかげを心にとかく
よ思ひしく成立のなすところの紛れ人ともなしといふ也
されどもやがてうつりかはる世のうつりかはりゆくにや　孟　冷泉院の名をかりて
皆みなそのうけさせしも冷泉院のうれへの御ありけるにとく
兵部卿もすでに　細　岸上の文の師のまへかきうつしたる書の弟子也
　
おやしうかしまへ
義久が一の三子成りの
其の心乃筆紙かり
師　源といひかし事也

むかしかやうなることもありけるも
やまともろこしにてかゝる御事どもを
（脇の注：御の瘧平愈し）
しどころ紛れにもくもりなく思ひしめ
おもうよれいのぬしはかなきそ事
うしまてしらする事はいかになるとくれ
（脇の注：脇のあるまじき）
いかし絡いとうらはかなくしきいるひ
しまる人のむくらるやうにてやさく

第一きこえ人々も
源の道を知るとも見なし人
もあれと悪名の心はづかしき
みも甚しく世をまじかふ
人るれは物からぞ
ことなるなり

このおほきみの世ほどいとかしけすかなささ
（脇の注：細　弘徽殿　源の退）
（脇の注：大后也　孟　弘徽殿と勝よし）
いの子もひとりのみなれば
（脇の注：物名の御心ちこそ　きても）
もちいとはかうしれども心地かもよ
（脇の注：御心の御にほひくやしく）
さうたくをするれいとほびてしけうら
ゆけはなまきにある人をもうなりかくれども
（脇の注：弘徽殿に）
らうしてはあるうちはけはうを給
（脇の注：二条太后に）
はしきるはするひこうけのみぬよ君もはうる
（脇の注：細　一条の大后の書きし）
はぐるかくしいふかうて非はいふうかくさ
（脇の注：悪名の兵部卿なくし）
ちど曉よものくえんぞうらへやうまきなど
すちさはぞそこゐすことの人めおほげ
（脇の注：勝月のをいふくし）
（脇の注：源のかみのかうさやかにしてきこえ）
く女房たちもかゝらずひてらうつぶひ
まうるよいとよろすく御絡りんかきなくて